

《甲子プロジェクト》

林愛作がいた山中商会

—世界を舞台にしたロマンある挑戦の歴史—

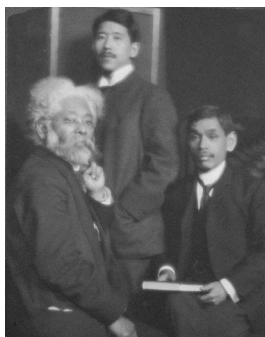
株式会社山中商会 山 中 譲

1. 林愛作・山中商会と旧甲子園ホテル

筆者は武庫川女子大学が創立された年に生まれた。52年前、兵庫県立芦屋高校体操部にいた高校三年生の頃、顧問の先生と武庫川女子高校を訪れたことがある。当時、武庫川女子高校の体操部は非常に強く、全国三連覇、個人でも優勝する成績であった。現在武庫川女子大学の甲子園会館は山中商会にいた林愛作と非常に縁の深いホテルであった。



明治37年(1904年)ニューヨーク店の社員
上段の右から2番目が林愛作



定次郎・林愛作が懇談



中央が林愛作

山中商会に残っている愛作の写真は3枚しかなく、明治37年ニューヨーク支店での集合写真と定次郎と愛作が客と懇談している写真である。

林愛作は10代で渡米しマウント・ハーモン校を経てウィスコンシン大学で学んでいた。山中商会への正式入社ははっきりとしないが、明治30年頃とされている。大学時代に山中商会ニューヨーク支店に度々訪れる中でそのまま入社したと思われる。山中商会には明治27年から現在に至るまで全ての入社に関する履歴書、入社誓約書、社員簿があるが、林愛作の名前は見つからなかったので現地採用でなかったかと推察される。しかし林愛作が美術商としてニューヨークの社交界で活躍したことは確かである。明治42年渋沢栄一が帝国ホテル会長を退任する時に、第百三十銀行頭取松本重太郎を通して帝国ホテル支配人になるように頼まれた。始めは断っていたが、定次郎、吉郎兵衛にお国のためであると説得され林愛作は帝国ホテル支配人に着任した。大正11年帝国ホテルで火災があり、引責辞任をした。その後昭和5年に甲子園ホテル支配人に就任した。

甲子園ホテルの設計をした建築家遠藤新の東京大学工学部建築学科での恩師伊東忠太は、雲崗石窟仏教寺院の発掘者であるが、学会発表をしなかったため発見者はフランス人になった。建築物は平安神宮、明治神宮、築地本願寺など多数あり、文化勲章を授与されている。

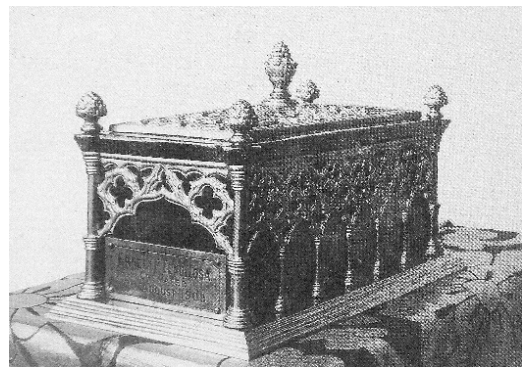
伊東忠太と同じく関野貞も遠藤新が入学した当時の教授である。関野は建築学史で大正 7 年天龍山石窟を発掘し、北京で定次郎と知り合った。山中商会と関係の深い人物である。

遠藤新は帝国ホテルでライトの作風に触れ、遠藤新から林愛作にアプローチをし、フランク・ロイド・ライトの事務所に入社できたと言われている。

フランク・ロイド・ライトは当時世界三大建築家の一人といわれていた。山中商会のニューヨーク支店の浮世絵の顧客であり、林愛作とは同じウィスコンシン大学で学んでいる。帝国ホテルのライト館は予算オーバー、工期の遅れで、林愛作が火事の引責辞任後しばらくして解雇され帰国した。



フェノロサー周忌追悼法会



フェノロサの棺

林愛作が山中商会在籍時に、アーネスト・フェノロサがロンドンで客死し埋葬された。フェノロサの妻メアリー夫人に頼まれ、ロンドン支店岡田友次の尽力で遺言通り、火葬し分骨されて大津市の園城寺法明院に埋葬した。フェノロサの一周忌追悼法会は初代山中吉郎兵衛が幹事となり園城寺法明院墓前で執り行った。昭和 2 年には定次郎が同じ地にウィリアム・スタージス・ビゲローの墓地を整え分骨し埋葬した。隣接するフェノロサの墓石を改修し、追悼法要を行った。協力者として山中吉郎兵衛、定次郎、松次郎、牛窪第二郎、林愛作の名が残っている。

2. 山中家の歴史

山中商会は 220 年の歴史がある。山中商会の商いの中で一番大きな取引は、ロックフェラーに 1925 年 17.5 万ドルで売った仏像である。現在はメトロポリタン美術館に所蔵されている。山中商会に関して書籍・論文が多数発表されており、博士号を取っ

た人物もいる。筑波大学 門田園子、コロンビア大学 山森由美子、立命館大学 山本真紗子である。

書籍には故山中定次郎翁伝編纂会『山中定次郎伝』、富田昇『流転清朝秘宝』、朽木ゆり子『ハウス・オブ・ヤマナカ』、山本真紗子『唐物屋から美術商へ』、山中商会の家具工場長の孫 村上邦夫の自費出版『村上九郎作 生涯記』などがある。

山中家は優秀な婿養子を重用することで発展を遂げてきた。そのため、分家が増え家系図は 10 ページ 200 名以上の親族が載っている。天山中家（北区天満に残った）が本家で、^{カド}角山中家（北浜角に店をかまえる）、南禅寺山中家（京都の南禅寺に別荘）、^{タカ}高山中家（高麗橋に店をかまえる）、京山中家（京都山中商会）がある。京都山中商会は京都が空襲に遭わなかったこともあり、現在も存続している。

山中家本家は元経師屋（現在の表具師）を営んでおり実質これが創業になる。のちに書画骨董の商いを始め古美術商になった。

^{カド}角山中家は吉郎兵衛が本家の古美術商「^{テン}天山中」山中吉兵衛の経営を掌握。最後は大阪美術倶楽部社長となった。個人商店から合名会社に組織を改め、世界の山中商会と言われる古美術の礎を築いた。

南禅寺山中家の定次郎が筆者の曾祖父にあたる。吉郎兵衛が没後、定次郎は株式会社山中商会を設立し、合名会社山中商会を吸収合併し世界的な美術商となった。

^{タカ}高山中家は定次郎と訪米した繁次郎の家である。後に株式会社山中商会の取締役役に就任した。

京都山中家は初代吉郎兵衛が亡くなる 1 年前に山中商会京都支店を合名会社京都山中商会とし松治郎を代表社員に就任させた。山中商会でも役員になっている。戦後は海外のコレクターも訪れ、米国美術館との取引は続いたが、美術品価格高騰と円高で古美術事業を縮小した。現在は当時の建物を利用し結婚式場、貸会場業を営んでいる。

3. 山中商会の歴史

3.1 明治期

明治 27 年に^{カド}角山中家の初代吉郎兵衛は、兄の三代目吉兵衛が経営する古美術商山中吉兵衛の経営を完全に掌握し山中グループの総帥になり、合名会社山中商会を設立、資本金 30 万円で古美術部門、貿易部門、京都山中商会の三輪がうまく機能する経営体制を構築した。この時に株式会社百三十銀行頭取 松本重太郎が顧問に就任し、貿易事業を発展させる資金調達を含めた体制が整った。

フェノロサ、ビゲローの協力を得て、5 万円相当の美術品を携えて、定次郎、繁次郎を明治 27 年 11 月にエンプレス・オブ・チャイナ号でニューヨークに向かわせた。ニューヨークでは牛窪第二郎（内務官僚、二代目ニューヨーク店長、取締役）、山中松治郎（合名会社京都山中商会代表社員、取締役）、森太三郎（ボストン店開店に伴い異

動、取締役)の3人が加わり5人体制になった。

明治33年ボストン支店を開設し、雑貨、工芸品、農園で盆栽も作り多角経営をしていた。しかし経営が上手く行かず閉店しかけるが大使館からの要請で継続した。

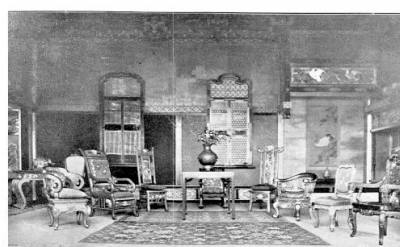
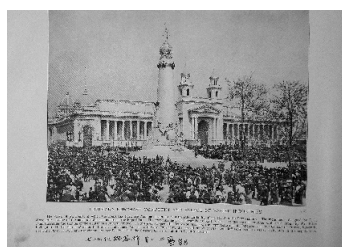


1919年 King George V



1920年 Queen Mary

ロンドン支店を開設し、初代支店長は山中六三郎が就任した。ロイヤル・ワラント(英国王室御用達)の認定を2度取得している。株式会社山中商会になってからも2度取得している。持ち帰った紋章2点は現在大阪市の本社入口に飾ってある。



セントルイス万博工藝館

日光式装飾室 山中商会のブース

日光式装飾室内の家具

同じく明治33年大阪福島で家具工場を始めた。金沢の工芸家村上九郎作を招聘し、セントルイス万博で日光式装飾室と内装飾品を出展し「建物及装飾品家具」部門で最高賞を受賞した。セントルイス万博の日本館が高峰譲吉に譲渡され、ニューヨーク州メリーウォルドで松楓殿として使用された。ここに山中商会の机と椅子を納品した。明治42年大阪市の北の火事で工場を焼失し、家具製造を断念した。



恭王府正門 1912年撮影 恭親王



恭王府正門 2005年撮影 93年ぶりの訪問

明治 45 年～46 年、山中商会一行は辛亥革命後の動向を調べるため訪中していた。袁世凱が部下の兵士に給料を支払わなかったため北京で掠奪事件が起こり、恭親王はこの掠奪を慮り蒐蔵の古器物を売ることにしたと聞き、山中商会一行は恭親王を訪問した。清朝恭親王のコレクションを一括購入し、日本、ニューヨーク、ロンドンのオークションにより全て売却した。総購入金額は定かではないが 20 万円以上 100 万円以下と推測され、合名会社の資本金 30 万円だったことを鑑みると吉郎兵衛が資金調達に奔走したことが考えられる。恭王府の財宝の中で乾隆帝の玉座は、2011 年中国嘉徳のオークションで 11 億円の値で落札された。現在も世界の家具オークションの中で最高落札額である。筆者は恭王府の復興に全面協力し、ニューヨークの恭親王オークション図録を寄贈した。

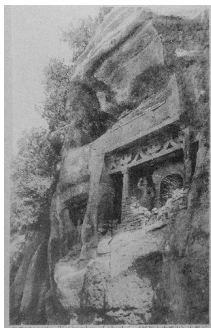
3.2 大正期

大正 6 年初代吉郎兵衛が亡くなった後、定次郎が株式会社山中商会を設立した。初代吉郎兵衛は名経営者であり、人材の確保と育成で最も高く評価される。不思議なのは吉郎兵衛が一度も海外に出向いた記録がないことである。吉郎兵衛と定次郎の関係は、吉郎兵衛が定次郎を経営者として育てながらも貿易に関しては定次郎に全幅の信頼を寄せ、定次郎も期待に応えるというものであった。大正 7 年に定次郎は株式会社山中商会を設立し、合名会社を吸収合併した。

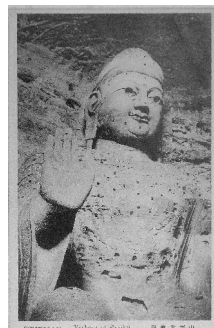
第一次世界大戦中フランスのアンリ・ヴェヴェールがドイツ軍の空襲が始まったため、山中商会に 8000 点の浮世絵コレクションを 10 万ポンド（20 億円）で 2 週間以内に一括購入してほしいと依頼した。ロンドン支店長 岡田友次が株式会社川崎造船社長 松方幸次郎に相談し、資金は鈴木商店が現金で用意した。その金を岡田がさらに巻き、残りはカバンに入れ、危険なドーバー海峡を渡った。コレクションはロンドン経由で日本に船積みされ無事到着した。このコレクションは現在、東京国立博物館が所蔵している。

山中商会にはニューヨーク、ボストン、ロンドン、シカゴ、北京、上海に支店があり、ほかに季節開業代理店があった。

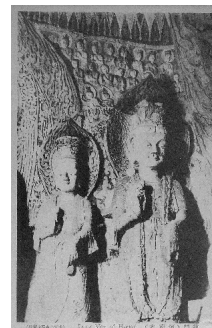
石窟画像は山中商会北京支店が作成して発送した絵葉書



天龍山石窟



雲崗石窟



龍門石窟

大正 7 年に中国天龍山石窟を関野貞が発見し、この時定次郎と北京で会っている。翌年関野貞がロンドンを訪問した時には山中商会社員が案内をし、その翌年ニューヨーク訪問時にも山中商会社員が世話をするという良き信頼関係を築いていた。関野が石窟を発見した時には乾板がなく写真を 3 枚しか撮れなかったもので、破壊される前に撮影して欲しいと要請があり、3 年間かけて破壊される前の貴重な写真を撮影した。
(天龍山・雲崗・龍門石窟を含め約 1200 点)

3.3 昭和期～現在

1935 年「国際支那美術展覧会」がジョージ 5 世即位 25 周年行事としてイギリスで開かれた。山中商会は展示業務を一任委託され、世界中の名品を揃え 17.5 万ドルでロックフェラーに売却した仏像も展示された。この他にも山中商会は 10 名上の社員を奉仕させ、別の場所で中国展を並行して成功させた。

1936 年ハーバード大学開校 300 年記念行事としてボストン美術館で「日本古美術展覧会」が開催された。出品物斡旋、陳列、監督など全ての業務を山中商会に委託された。この時も山中商会は独自の「日本仏教美術展」をボストン・アートクラブで開催して、商いに精を出し大盛況であった。

英国の「国際支那美術展覧会」とハーバード大学開校 300 年記念行事を成功に導いた後、定次郎は逝去した。その 2 週間以内に「時代錦繡展覧会」「日本古陶磁器・時代民藝品展覧会」の開催があったが、その準備も全て定次郎がしていた。図録には定次郎が生前に執筆した序文が掲載されている。

定次郎が逝去後は古参社員の取締役岡田友次が暫定的に社長に就き、役員・幹部社員が一致団結して会社を盛り立てる体制を整え、長男吉太郎に社長を譲った後も岡田友次は 3 年間常務取締役として尽力した。

アメリカの山中商会は太平洋戦争前の気配を感じ、引揚を決めていち早く荷造りを始め港まで運んでいた。これを聞いた野村吉三郎駐米大使は「戦争は起こらない」と断言し、在米日本人がパニックになるため中止するよう求めたため、やむなくの説得に応じて荷を元に戻した。結果米国の山中商会の資産は接収されてしまった。

東京麹町 3 番地に 705 坪山中商会東京美術品陳列所の建設計画があった。完成設計図もあったが、戦争の兆候があったため見送りとなった。もしこれが建設されていたら間違いなく空襲で焼失したと推測される。中止になったことにより会社の潤沢な資金は戦後まで守られ、戦争で海外資産の 80%を差し押さえられたが、戦後 3 年ほどは退職金を満額支払っていた。

岡田友次が社長を退任し、戦中は宮又一（元米国勤務）、大川季一（元ロンドン支店長）が取締役、高田又四郎（元北京支店長）が監査役に就任して難しい局面で吉太郎を支えた。

昭和 16 年 7 月に米国は日本の仏印進駐に対抗、日本人の資産凍結を行った。昭和 19

年に美術品は競売で安価売却されニューヨーク・ボストン・シカゴ店は消滅した。最後の 5 代目ロンドン支店長井上久四郎は最後の引揚船 伏見丸で出航する前に危険を感じ田中末太郎氏に帳簿を預けた。同氏は在英大使館の加藤喜太郎氏に託し 2 年後に無事に山中商会に届いた。国内の資料は高麗橋の山中商会本店にあったため空襲で焼失したが、ロンドン支店関係の資料は南禅寺の別荘で保管されていたため戦火を免れた。

昭和 28 年から東京海上が幹事になり弁護士を雇い、米国による凍結、接收された資産の返却交渉を行った。昭和 36 年に米国の交渉窓口が解散となり在米返却期成会は自然消滅した。山中商会には 8 年間の交渉記録がある。

現在は大阪市の山中商会本店に貴重な資料が数多くあることから各方面から問い合わせが多い。



藤田が山中商会から購入の 5 点

藤田美術館のクリスティーズ NY オークション

— 山中商会関連 —

出品作品: 52 点
総売上額: 2,130,000,000円 (約 200億円) 手数料込・バース
35% 1,484,250,000円

① 日本画の海外展開に貢献した美術品 5 点

② 中国美術の海外展開に貢献した美術品 12 点

③ 書画類

④ 美術品

⑤ 美術品

⑥ 美術品

⑦ 美術品

⑧ 美術品

⑨ 美術品

⑩ 美術品

⑪ 美術品

⑫ 美術品

⑬ 美術品

⑭ 美術品

⑮ 美術品

⑯ 美術品

⑰ 美術品

⑱ 美術品

⑲ 美術品

⑳ 美術品

㉑ 美術品

㉒ 美術品

㉓ 美術品

㉔ 美術品

㉕ 美術品

㉖ 美術品

㉗ 美術品

㉘ 美術品

㉙ 美術品

㉚ 美術品

㉛ 美術品

㉜ 美術品

㉝ 美術品

㉞ 美術品

㉟ 美術品

㊱ 美術品

㊲ 美術品

㊳ 美術品

㊴ 美術品

㊵ 美術品

㊶ 美術品

㊷ 美術品

㊸ 美術品

㊹ 美術品

㊺ 美術品

㊻ 美術品

㊼ 美術品

㊽ 美術品

㊾ 美術品

㊿ 美術品

㊿ 美術品

㊿ 美術品

㊿ 美術品

㊿ 美術品

㊿ 美術品

㊿ 美術品

㊿ 美術品

㊿ 美術品

㊿ 美術品



藤田美術館の藤田清館長

クリスティーズのニューヨークオークションで山中商会の出所来歴を確認してもらいたいと問い合わせが殺到した。藤田美術館は平成 29 年 3 月に開催されたクリスティーズ・ニューヨークで所蔵品 31 点出展した。総売上額は約 300 億円、山中商会が藤田美術館に販売した中国品 5 点は 200 億円であった。

4. 定次郎の考え方

昭和 8 年～11 年にかけて定次郎が書いた直筆の手記がある。「職業は生活の糧というよりは趣味である。趣味が高じて国のため、世界中のために貢献できるとは、なんと素晴らしいことだろう」と定次郎の仕事に対する率直な考え方がわかる。

定次郎の社員に対する考え方から山中商会は従業員のリストラをしなかった。定年に達しても希望者は引続き働くことができた。解雇の必要のない優秀な人材しか採用してはいけない。解雇しなければならない人物を採用したなら、経営者は恥じなけれ

ばいけない。仕事は人、社員は自分の分身である。

近代のマーケティング手法は顧客第一主義が謳われるが、100 年前にすでに定次郎はレベルの高い内容で実践していた。商品の説明を丁寧にして、それで理解を得た上でなければ買ってもらわなくてもよい。十分な説明をするために客に何でも知らせた。自分に厳しく客にも厳しい姿勢であった。

山中商会は災害に対する寄付、大学等への研究調査に対して惜しみなく寄付をしており、この社会貢献に対して山中商会と定次郎宛の感謝状が 64 枚もある。定次郎は日本のみならず海外の大学・美術館との親交を大切にして、多数の美術品を研究のために寄贈した。

5. おわりに

「山中商会の歴史」に関する書籍、論文が多く発表されているが、まだまだ知られていない部分が多くある。曾祖父の歩んだ道のりを子孫としてより深く探求したいと強く感じた。山中の家・人・会社を時系列に整理することから始めたが、その中から新しい発見もあり執筆を忘れて読みふけてしまうこともあった。



中国の上海書画出版社より古陶磁研究者の金立言氏編集、山中商会監修からなる「山中商会経手中国芸術品資料匯編」を出版した。この書籍は山中商会が日本で発行した全ての展覧会図録の中国美術品を網羅した資料総集編。

収録作品の総数は 6000 点以上で図版は 1100 点あり、日本語、中国語、英語の 3 ヶ国語で表記されている。高価な書籍であるが、中国では 1 ヶ月で完売した。

今までにどの研究者もその内容の多さと深さで手付かずとなっている海外関連の資料 109 冊とアルバム 47 冊に基づく分析と調査をまとめることで「山中商会の歴史」が完成すると考えている。

仮称世界編は 10000 点以上の資料と画像のスキャンと修正作業が完了して、これから編集作業に入る。目標とし中国美術に関する書籍の最高峰をめざしており、来年末頃には発行したいと考えている。

(2020 年 1 月 15 日、生活美学研究所本年度甲子研究会における講演に基づく)

コーディネーター 武庫川女子大学生生活環境学部教授 黒田 智子